

# 山行報告書

京都田辺山友会

報告者 秋月 康敏

山名	壺坂寺と高取城跡		山行名	公開登山と登山祭典		
ルート	壺坂山駅～壺坂寺～五百羅漢～高取城跡～猿石～七曲～武家屋敷～壺坂寺駅					
山行日	2015. 11. 29		天候	晴		
参加者	CL：秋月 康敏 SL：倉光展子、上田美織 総員42名 一般：(女) 大類、北川、吉沢、 (男) 島谷、高谷、畑、山口、安田、山中、 9名 会員：(女) 伊藤、江平、河合、河野、染矢、竹原絹、玉井、山田、 (男) 赤松、上田、梅澤、岡部、嘉手苺、金本、倉光、園上、竹原、津田、坪田、 中島、中田、西上、西川、平尾、藤富、峯岡、三宅、村上、守口、山口、 39名					
	コースタイム					
	地名		時：分	地名		時：分
	壺坂山駅	集		猿石	着	13：40
		発	9：50		発	13：45
	酒蔵前スレッチ	着	10：00	七曲：国見櫓	着	13：50
		発	10：10		発	14：00
	壺坂寺	着	10：15	武家屋敷	着	15：00
		発	10：30		発	15：10
	五百羅漢	着	10：40	壺坂山駅	着	15：30
		発	10：50		発	
高取城跡	着	12：50		着		
	発	13：30		発		
城跡の名残を惜しんで下山開始 …山友会への入会を期待したい…						
山行報告 *当初計画では10名強の参加と想定していたので電車切符は各自購入としていたが、参加者が増加したので竹原さんに割引切符の購入を依頼した。結果、総員で約16千円程安く行けた。切符購入、保険料集金、名簿・班編成表配布など、協力を得て助かりました。 *津田さんのアドバイスで班長・一般参加者の紹介を出発前に行う、一般参加者から好評。 *4人の班長(中田・守口・上田・梅澤)がしっかりリードしたので、遅れ・故障者もなく無事下山できました。 *園上山行部長が救急セットを借り出して持ってくれました。使う事はなかったですがお世話になりました。 *藤富さんの先導、絶妙な歩行速度で「疲れもなくよかった！」と一般参加者からの声あり。歩行調整、休憩タイム調整など、ベテランの味でありありがとうございました。 *途中のトイレが1つ故障で女性の方には迷惑かかったかと思えます。上田班長が直してくれて最後はうまく利用できました。 *壺坂寺では元会長の倉光さんが面白おかしく説明を、空気が和んで一般参加者も喜んでくれました。お世話になりました。 *集合写真はいいポジションで撮れました。岡部さんには毎回お世話になっています。一般参加者にどうやって渡すかを考えます。 *染矢労山担当部長から登山祭典について説明。山・自然を愛する気持ち、山友会に対する理解が得られたと思われま。						
ヒヤリ・ハット：なし						

倉光 正巳

▼前回参加の大仏鉄道跡に比べると、はるかに登りの多いコースだ。甘南備山に時々登る程度の身としては、落後の可能性も半分くらいあると考えていたが、何とか皆さんと一緒に歩き通せた。歩きやすいペースでリードして下さった藤富さん、途中トイレ休憩が長くなりそうだったので、その間先行させていただいた折、さりげなくフォローして下さった津田さん、私の弁当その他を運び介護役もして呉れたわがカミサン、リーダーの秋月さんを始め同行のみなさん方、そして、黙って見守って下さった壺坂寺の観音さまに、心より感謝致します。

▼私と壺坂寺、高取山との因縁は10月号の山行案内にオマケとしてくっ付けて頂いた文章で触れたので、ここでは繰り返さない。50年以上の昔から行ってみたいと思っていた所を歩けたので、二重に嬉しかった。

▼途中でいろいろ感じたり、気が付いたりしたこと、また、次の機会には寄ってみたいと思った所などがあったので、それらを書き並べて感想文としたい。

▼近鉄電車が「岡寺」「飛鳥」と止まっていく。「懐かしいなー、しばらく来ていないなー」と思ううちに、「壺阪山駅」到着。初めての下車だ。下車すると「近くの名所」なる白い看板が目に入る。「お里沢市の墓1.5キロ」なる表示が目に入る。壺坂霊験記の主人公だ。ありがたいお話だが、伝承を下敷きにしたフィクション半分の話と思い込んでいた。墓までであるとすると、かなりリアルな話になってくる。墓自体がフィクションならばどうしようもないが…。次の機会には寄ってみなければ…。

▼高取の街並みは歴史を感じさせる細長い通りだ。古い家を改装した店が多くある。壺坂寺（正式には壺阪山南法華寺というそうなの）は703年創建、高取城は戦国時代に始まるそうだから、寺の方がはるかに古い。門前町が城下町に変わっていったのだろうか。

▼壺坂寺までも結構な坂だ。こういう山間のお寺に来るたびに思うのだが、昔の人は何を思って、こういう不便なところまでシンドイ思いをしてお参りに来たのだろうか。信心のスゴサを思う。秋月リーダーの指示により、入口前で臨時学芸員として「壺坂霊験記」の解説をば相務める。そのまま出発して、観音さまは遥拝のみ。コースを歩き終えてみれば、たしかにお寺を拝観していたら時間不足になってしまう。次の機会には「お礼参り」を兼ねて、観音様の御前まで直々にまかり越さねばなるまいと思っている。

▼だんだん坂がきつくなる。途中、簡易トイレがありトイレ休憩となったが、数が少ない。長くなりそうだ。リーダーに断って、カミサン共々先行させていただく。この日の一番の急坂が待ち構えていた。シンドイが何とかゆっくりマイペースで登っていく。先行は正解だった。無事、天守閣から下山道に続く尾根道に到着した。三叉路だ。本隊を待ちがてら休憩していると、小さな標識があるのに気が付いた。反対側を下っていく細い道があって、本当は十字路なのだ。標識にいわく「芋峠へ2.5キロ」(数字は怪しい)。「エー！こっちへ下りたい」と思った。

▼ずっと以前のこと、何の雑誌だったかも忘れたが、歴史家や作家に「わたしの好きな○○」を推薦させる特集をやっていた。○○は「町」であったり、「街道」であったりするのだが、私が惹かれたのは「峠」だった。私はなぜか峠が好きだ。読んでいくと作家の司馬遼太郎が書いていた。推薦は「芋峠」という。聞いたことがない。どこにあるのかも知らない。解説を読んで飛鳥と吉野を結ぶ道にある峠だとわかった。調べてみると、飛鳥の石舞台古墳のあたりから飛鳥川沿いに遡っていく道のような。いまは一車線程度の道路になっているようで車でも行けそうだが、ここは歩いていかねば意味がなからう。

飛鳥に都があったころ、吉野は離宮とされ、天皇がしばしば訪れたようだ。近江に都を移した天智天皇が亡くなると、息子の天智皇子と弟の大海人皇子との間で後継者争いが始まる。壬申の乱である。当初、大海人皇子は飛鳥から吉野に逃れるが、以後体勢を立て直し、結局勝利を収める。天武天皇となり、都を飛鳥に戻す。これらの事項に出てくる飛鳥と吉野を結ぶ道に「芋峠」はあったのだ。言ってみれば、当時の一級国道だ。でも高取山から芋峠へ下る道があるなんて、まったく知らなかった。どの道でもいい、芋峠を歩いてみたい。新しい目標ができた感じだった。

▼天守閣跡で昼食。今年の夏ごろ、新聞に高取城の記事が出た。「切り抜き」するのを忘れたのでいい加減な話になるが、航空写真で高取城跡を調査したら、当時の城の縄張りや、いま石垣が残っている範囲よりはるかに広く、いま思われている以上に大規模な山城だったという。昼食を食べるだけで精いっぱい昼休憩。城跡だ

けでもじっくり見まわる時間がなく、ちょっと残念。次の機会には、石垣のある範囲はもちろん、木立の間を這いずり回って、崩れた石垣の一つでも発見したい、なんて思ってしまった。

南の谷間に集落が見える。どうやら吉野川沿いの町のような感じだ。

▼下りにかかる。すぐに「国見櫓」分岐につく。主道路から枝道にそれる。櫓跡からは藤原京方面がよく見えた。平野の中にポコポコポコと小さな丘がたくさん見える。どうやら耳成、畝傍、香久山の大和三山と、その他大勢の丘らしい。こんな角度からの大和三山の眺めは初めてだ。飛鳥はもっと高取山近くなので、足元の山に隠れて見えない。先ほどの天守から吉野川が見えたことと合わせると、高取山が飛鳥と吉野を隔てる山であることがよくわかる。その東側の山麓に芋峠があるのは当然の関係だ。いま飛鳥と吉野を結ぶ主要道路は、高取山の西側を通っている。芋峠を通る道は、万葉集にも多く詠まれている飛鳥川沿いなので、そのご威光で開発を免れ、古い姿で生き残ったのだろうか。何にしてもありがたいことだ。

▼無事下山。高取の街で解散。女性連に誘われ（カミサンが）、私も「黒一点」としてスイーツを堪能。この会も解散後、行き過ぎてしまった「お里沢市ゆかりの伊勢屋敷跡」なるものを見に後戻りする。でも何が「ゆかり」なのかよくわからなかった。インターネットでの予習で知った最後の課題。国見櫓分岐のすぐ後に「二の門」跡があった。その門自体が高取の街のお寺の門として残っているという。駅を通り過ぎて400mほど。ここに行ってみる。大きな観音開きの扉の右側に小さなくぐり戸のある門だった。元「二の門」を移築したものの、なんていう説明も全くない。のどかなものだ。子嶋町にある子嶋山子嶋寺というお寺だ。なんと単純明快な名前だろう！ 現地解散のおかげで、2、3知見が広がった。

▼それにしても、高い山城だ。毎日登城するのは大変だったろう。日用品の持ち上がりも大変だったろう。「通勤手当」は出たのだろうか？ 少し歳を取ったり、私のように足を痛めたりしたら、すぐさま「隠居」しなければならなくなりそうだ。障害者や老人にやさしい現代社会や山友会？に感謝するばかり。

▼帰宅後数日たって、面白い記事を発見した。飛鳥駅の近くの施設に「五升臼」という約200年前に作られたケヤキの大臼が残っているという。今も使われているそう。なんと、これが高取城で使われていた臼だという。イヤハヤ、いろんなものが残っているもんですね。次の機会にはここにも…。

▼ここまで書いてきた「宿題」を全部こなそうと思うと、今回以上に忙しい山行になりそうだ！

「飛鳥好き」なもので、飛鳥がらみの話になると長くなってしまふ。ゴメンナサイ。（終わり）

## 公開山行 高取城巡りに参加して

西上 正

3～4年前迄は山行に対して不安は感じなかったが、最近山行自体御無沙汰気味で、参加に不安を感じる様になって来た。

今回高取城跡は初めて登った時からして半世紀になる。戦後の日本も次第に落ち着いて来たとし、人々が野や山に出掛ける時代に入って来ている時期であった。その当時の高取城は未だ荒れ放題に放置されていた。道も藪こぎ状態の中で登った記憶を思い出す。

1331～34年高取城は越智邦澄によって城を構えたと云われるが史料はない由。海拔583米の高取山は大和盆地、吉野方面を監視するには最高の場所で、又吉野に進行する敵を阻止するにも好適な要塞である。しかしこの山上に築城の為に多くの石を運び揚げることは容易なことではなかつたろう。只々感心するのみである。

城の戦史は越智氏の時代に華々しい戦歴はあったが、豊臣秀吉の死後、徳川譜代の植村氏が関東から2万5千石で城主となり、14代読んで明治の時代に入る。時代の流れを感じる。

明治6年（1873年）3月県下の城と陣屋の入札で高取城は7円35銭6里で落札された。当時は城の建物は残っていたが、その後いつのまにか城が消えてしまっていて、現在に至っているとか。

山口 博

下山後 CL 秋月さんより解散宣言。それぞれ駅に向かい壺坂駅には時 15 時 30 分に到着して、時間を見ると 38 分に電車がありグッとタイミングです。

ホームで電車を待っていると秋月さんが近づいて来て“山口さん想文をお願いします”。

秋月さんの依頼で断る事も出来ず止む無く引き受けてしまいました。全く文才の無い私の拙い感想文で御容赦ください。

新田辺駅で参加者の名簿を貰い吃驚！何と 42 名の参加。労山祭典で労山部の皆さんが参加されていて、会員 33 名で公開登山での一般市民も 9 名の参加です。

一般は常連や今回初めての方も 4 名が参加していました。OB の畑さんも参加され懐かし顔、畑さんは私の日本百名山の完登の登山に参加して頂き、思いでなど話して呉れました。

高取城跡に初めて登ったのは 30 年位前になります。会社の山の会の仲間とでした。

その後電車で交通のアクセスが良いので、何度も登って居ます。今年 3 月にも“雛まつり”を見に来て登りました。今回の壺坂寺からの登山コースは 2 回目です。

平成 16 年 2 月に浜北さんが CL で壺坂寺から高取城跡に登り、明日香まで歩き石舞台を見て飛鳥駅から帰りました。

最初に登った高取城跡は石垣も崩れていて、登山道も整備されて居ませんでした。その後石垣も修復されて綺麗に成り、登山道も整備されて町並みも美しく成りました。

壺坂寺は今ではこんな山の中と思いますが、南北時代の当時は大和と吉野の土佐街道の拠点として大いに賑わったのでしょう。

お里、沢市の墓を過ぎ、やがて壺坂寺に到着しました。此处で倉光正巳さんからお里、沢市のお話を拝聴しました。この物語は浄瑠璃で有名で、子供の頃淡路島では人形浄瑠璃が盛んで、村に来た人形芝居を見に行きました。

壺坂寺は素通りで登山道に入ると山腹に磨崖仏、五百羅漢石仏群は露出した岩塊に彫られ羅漢石仏など、山道には 1 3 仏や数えきれない石仏が点在しています。それぞれが変わった表情でしょうが風化して輪郭しか判りませんでした。

壺坂口門から中門・大手門・二の丸・本丸と進んで、迷路の様な石垣の間を歩くとやがて一段と高い本丸に着きました。予定より早く 12 時 50 分に到着出来て良かったです。

眼下に飛鳥の街を見下ろし正面の大峰・大台の連峰は天気良くて素晴らしい眺めです。連峰の奥の尖った山は八経が岳か？残念ながら山座は固定出来ませんので勝手に想像し、平成 20 年に大峰奥崖道を吉野から熊野までの 100 キロを三回に分けて縦走したのを思い出しました。食事の後 1 時 30 分に集合写真を撮って下山しました。

高取城は備中高梁の松山城と岐阜の岩村城と日本三大山城に選ばれている。

松山城跡は 4 月に岩村城跡は 10 月に行って来ました。お蔭で好天にめぐまれて楽しいハイキングでした。CL 秋月さんお世話に成りました。有難う御座いました。



## 登山祭典&公開登山

労山担当部長 染矢つやこ

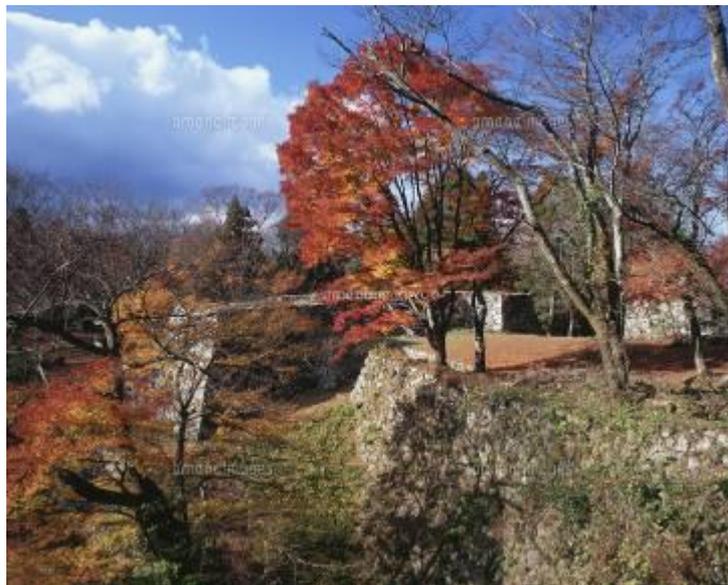
予想以上の参加者に労山部員全員驚きでした。一般参加者の多くが「市の広報を見て」でした。例年、登山祭典は10月末でしたが今年は市民秋山と重なった為11月末に変更しました。

2月の部会で行先・担当者決め。「高取城跡」はハイキングなので、会員拡大を目的に公開登山を兼ねる事になりました。広報掲載・市民文化祭にカラーの山行案内を置く等、一般の方が9名と効果があったように思います。今年の公開登山は「労山担当部」が担当しましたが、毎年労山部という訳ではありません。食事前に担当の秋月さんから「登山祭典について話をして」と言われましたが、大勢の前で上手に説明が出来ませんでした。お詫び致します。誌面を借りて改めて説明をさせて戴きます。

「登山祭典」は京都府勤労者山岳連盟が加盟する「新日本スポーツ連盟」が毎年「スポーツ祭典」を実施しています。この「スポーツ祭典」は国民の権利であり、文化であるスポーツを広く普及し、誰でもが享受できるものにするということで取り組まれています。

京都府勤労者山岳連盟ではその「スポーツ祭典」の一環として、登山を勤労者の身近なものにする為、10月の最終日曜日に行っています。以前は複数の会が同じ場所・同じ時間に登っていましたが自然保護の観点から現在は会ごとに実施しています。「山」を通じてお互いの絆を深める催しでもあります。

「登山祭典」を広く会員外の皆さんの参加を得て、登山・ハイキング愛好者を増やすとともに会員にもなってもらう取り組みを集中的に行おうと10月11月を「会員拡大月間」とも位置付け取り組んでいます。労山部員各々が下見・保険加入手続き・先導・史跡説明・写真・CLにと活躍、役員の方々の協力も得られ成功裡に終わった事を感謝致します。



## 公開登山 壺坂寺と高取城跡

一般参加 山中 隆広

今回の公開登山が春以来、久しぶりの登山になりました。久しぶりに会う顔ぶれの人もいて懐かしく思いました。標高は低いものの、山城としての規模は日本一を持つ高取山と聞いて参加しました。また、紅葉に彩られた城跡と石垣の光景にも魅力を感じました。少し肌寒かったものの、天候にも恵まれ風も穏やかで、絶好のハイキング日和になりました。かなり冷え込んでいるだろうと思って服を着込んで行きましたが、そんな心配はいらなかったです。

壺坂山駅を下車して、しばらくすると城下町らしい町並みが続き、どこか心穏やかで時間に追われている日常を忘れさせてくれるぐらいの感覚さえ感じました。少し遅かったのか多く落ち葉が登山道を埋め尽くしていました。その上を踏みしめながら、秋の雰 囲気を満喫して山頂を目指しました。山肌が真っ赤に燃え盛るような紅葉は望めませんでした。僕の頭の中のイメージとは少し違 っていて残念でした。山頂に近づくにつれ巨大な石で積み上げられた石垣が出現しはじめ、その中を歩いていると“時”の経過を感じ昔の時代にタイムスリップしたかのような気になって、テンションが上がってきました。そして山頂に到着！。そこは広場にな っていて景色も良く格好の休憩ポイントでした。そこで昼食を取り、各々が弁当を広げ会話も弾み楽しく時間を過ごせました。

今回の参加者数は43人もの大人数で隊列も長くリーダーの方はまとめるのに大変苦労されたのではなかったでしょうか。本当にお疲れさまでした。今回は低山ではありましたが、久しぶりの僕にとっては慌ただしい生活を抜け山に出かけられて、調度良い運動になり息抜きになりました。また都合がつけば参加したいと思っています。

どうも有難うございました。



※ 先月号に投稿がありましたが行き違いで掲載が遅くなりました。申し訳ありません。

▼まずは、高取城址について新たに知ったことを報告したい。上記タイトルで、大河ドラマの順序が間違っているのではないかと言われそうだが、以下、読んでみてください。

読書家の友人がいる。私が「やっと高取山にトライする決心をした」と言ったら、彼は「司馬遼太郎の短編小説『おお、大砲』に高取城植村藩のことが出てきますね」と教えてくれた。私は知らなかった。山行までに読む余裕がなく、感想文を書く段階でも気になりながら読めなかった。感想文を提出してから、やっと図書館で探し出して読んだ。面白かった。これは同行のみなさんにも紹介しておかなければ、と思い立ったわけだ。

▼読んでいない方に小説のストーリーをばらしてしまうのはルール違反だろう。なるべく史実らしき部分だけ紹介して、読む楽しみは残すべく努力してみる。「むかし、和州高取の植村藩に、ブリキトースという威力ある大砲が居た。居た、としか言いようのないほど、それは生きもののような扱いを、家中から受けていた。」小説はこう始まる。つまりは、小説の主人公としては、ある植村藩士が出てくるのだが、もう一人？の主人公はこの「大砲」なのだ。

▼まず、小説の時代的背景を説明しておかねばならない。「大阪冬の陣」といえば、徳川家康が豊臣家を滅ぼすべく大阪城を攻めるが、真田信繁（幸村）が圧倒的大軍の徳川軍を「真田丸」で迎え撃ち、翻弄し、膠着状態へ持ち込んだことで名高い。その打開策として家康がとった戦法が、信繁を無視して、四方八方から大砲を大阪城天守閣めがけて打ち込むという荒業であった。それで侍女が数人亡くなったりしたため淀君が怖気づいて、信繁を無視して講和をしてしまう。その結果、ドサクサ紛れに外堀を埋められ、真田丸も破壊される。かくして、5か月後には徳川が再度、大阪城に攻めてくる。「夏の陣」である。これだけの下準備がしてあるから、今度は信繁の奮戦むなしく、大阪城は落ちてしまう（パンパパンパン！と張り扇の音）。詳しくは、今年のNHK大河ドラマに乞うご期待、というわけだ。この冬の陣が1614年11月。大砲は、イギリス製、オランダ製、国産品と合わせると百門近くあったというが、この小説の主人公がこの「オランダ製」の青銅砲なのだ。

▼植村家は家康の祖父の代から仕えた、徳川家きっての譜代として信任を受けていた、と言われる。その証拠に、寛永18年（1641）大和高取に2万5千石（小藩である）で封ぜられたとき、六門の大砲（オオツツ）を下賜された、というのがこの藩の自負だった。この大砲が前記冬の陣で活躍したものの一部であり、この小説の主人公である。以後、大砲は白壁の蔵に収められ、大砲奉行の許しがないと見ることができず、蔵に入るときは礼装をつけたという。この大砲は六家の「砲術方」（50石で、この小藩では上士と言えるそう）の担当となる。

▼時は流れる。植村家は大砲ともども生き延びて幕末を迎える。世は勤王か佐幕か、攘夷か開国かで混乱する。詳しくは明治維新史を勉強してほしいが、一部のみ記せば、攘夷の立場で孤立する長州藩は、久坂玄瑞らの必死の朝廷工作に成功し、攘夷の方針を取り付ける。そして孝明天皇の大和行幸が決まる。ところが、行幸前夜、反対派の工作で方針が大逆転する（攘夷派の公家の「七卿落ち」はこの時のこと）。いつの時代でも「お先走り」がいる。この時は天誅組なる集団がそれであり、悲喜劇が生じる。一夜にして逆賊となった天誅組が高取城を攻める。寄せ集めとはいえ天誅組千人、対する植村藩兵わずか150人の対決。かの大砲もちろん二百数十年ぶりの出陣と相成る。大砲方の家では火薬の調合は代々秘伝、口伝というわけだが、口伝には誤伝があったのか、どの砲も発砲できず仕舞い。ただ一砲だけ、そこの若い主（この小説の主人公）が養子に入ったばかりで口伝を知らず、大坂の緒方塾で学んだ化学知識で調合し、それだけが発砲

に成功する。狙いは外れるが、発砲音の大きさと偶然の成り行きとで天誅組が総崩れとなり、高取藩の圧勝に終わる…。いろいろあって、明治維新を迎え廃藩となる。

▼かくして、かの高取城植村藩は、大砲に始まり大砲に終わることになった。それは奇しくも今年と去年のNHK大河ドラマに重なることに気付いて、私は嬉しくなったという次第。

▼私の読んだ本の「解説」(尾崎秀樹)には、以下のように書かれている。この『ああ、大砲』(昭和36年4月)は「ばかばかしくさえ思われるほどむなしい歴史の一断面をみごとにえぐった傑作だ。」「司馬遼太郎の作品をひとつあげるとすれば、この『ああ、大砲』をおすことを躊躇しない」とべた褒めだ。さらに言う。「作者はこの話を資料で読んだとき、しばらく笑いが止まらなかったそうだ…」と。二百数十年の天下泰平は、封建制の大黒柱まで腐らせていたのだ。

▼ちなみに、大砲のあだ名「ブリキトース」の意味は、鉄板に錫箔をつけた「ブリキ」を「徹す(とおす)」(鉄板をも貫通する)という意味だそう。「ヒネルトジャーってなーんだ?」「水道!」という子供の頃の遊びを思い出す話だが、これが史実なのか作者の創作なのかは不明である。

▼こういうことを知った上で高取城址を歩けば、大砲を収めた蔵があった場所はどこだろう?、最後に大砲をぶっ放したのはどの辺だろう?、大砲は明治維新以後どうなったのか? などという興味も生じて、城址の見方もまた深まったかもしれない。幾つになっても、予習、復習は、金儲けのタネにはならないけど、人生を楽しむ役には立つようだ。これをもって、高取城址登山の最大の教訓としたい!?

▼少しスペースが余ったので、壺坂寺についても一言。壺坂寺には入っていないので、その全貌は私にはまだよく分からない。でも大きな石製の観音像があったりして、良くも悪くも、普通の古寺とは違う派手な雰囲気を持っているように感じていた。ところがWebで調べてみると、なかなかすごいお寺のようだ。壺坂靈験記にちなんでか、目の見えない老人だけを対象にした老人ホームが併設されているという。これは無断で書くが、山友会仲間の山下さんが民生委員をされていたとき、ここに視察に行かれたそうだが、目の見えない人のために、建物にいろいろ工夫がされており、住人も生き生きと暮らしていらっしやっただのに感動した、と。さらにインドでの救ライ(ハンセン病)運動にも援助を続けたという。それに対するインドからの感謝が、インド石製の大観音像であるらしい。よほど見識のあるお坊さんがいらっしやっただのか、これまた壺坂靈験記の続きのお話なのか…。次の機会には少々高くても入場料をちゃんと払い、できればささやかなる寄付でもして、観音さまの御前に立ちたいものだと思っている。

▼「羅漢」とは修行中の、仏陀の弟子のことらしい。壺坂寺と高取城址の中間にあった五百羅漢は、壺坂寺の奥の院ともいわれるが、制作ははるかに時代が下がって、高取城建設の際、工事の無事を祈って作られたらしい。それで思い出したこと。羅漢さんはいろんな姿態、表情をしている。それを面白がった子供の遊戯があった。「羅漢回し」という。「♪羅漢さんがそろたらまわそじゃないか、ヨイヤサノヨイヤサ…」とはやしながら、まず、それぞれが好きなポーズや表情をとる。次の掛け声で、右隣のポーズをまねする。というわけで、あるポーズに着目すると、そのポーズがグルグル回っていく。誰かが失敗するとオシマイ。他愛もない遊びだが、なかなか面白かった。今回こんなことを思い出して、あることに気が付いた。サッカーなどの競技場の客席でやられるスタンディング・ウェーブという応援がある。あれは一番単純な羅漢回しではないか。もっと言うと、この羅漢回しこそが、電波や光を含む「波動」なるものの本質である、ということをごくここで解き明かしたかったのだが、嫌われそうなのでこれはやめます。(終わり)